

1965 • 代表作時代小説

文藝家協會編

昭和四十年度

代表作時代小説

編纂委員

武蔵野次郎

尾崎秀樹 村上元三

富田常雄 山岡莊八

東京文藝社刊

昭和四十年度

代表作時代小説

七〇〇円

無検印
承認

昭和四十年九月十日印刷

昭和四十年九月十五日発行

編纂者 日本文芸家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区払方町一

振替・東京二一七五七

電話・(二六〇)二五五〇

まえがき

戦後二十年目の状況

尾崎 秀樹

戦後の二十年間に日本の大衆文学が経た歴史は、それ以前の全歴史にまさるともおとらないものがあつた。時代小説だけに限ってみても、占領による受難、明朗時代小説の復活、捕物帖ブーム、剣豪リバイバル、残酷小説の登場、忍法ものの流行、「家康」ブーム、維新小説の盛況と、この二十年の足跡が語る時代小説の推移は、それだけで一冊のスペースをついやすに足る内容と量を持つていそうだ。しかもその全過程を通して一貫して読みとれるのは、大衆文学の質的な前進と、マスコミ化の進行ではないだろうか。

占領という事態によつて「剣」と「義理人情」を抑えられた体験は、少しも大衆文学の歴史を阻むものとはならず、かえつて質的な更新と飛躍をもたらしたといえる。その一例が時代小説における現代性の強化であろう。よくいわれるように「マゲをのつけた現代人」の小説が、意識・無意識を問わず読まれはじめたのもそれ以後の現象ではないか。また映像メディアの普及も、時

代小説の表現スタイル（色調やテンポ）に直接・間接の影響をあたえた。大衆文学はそれらの状況をマイナス与件とすることなく、この二十年の歴史を築いてきたのだ。そのことが昭和四十年という時点に立つて、改めて回顧される。

昭和三十年に刊行された第一巻の〈あとがき〉で、編集委員のひとり萱原宏一は戦後十年間の時代小説の消長をかえりみ、敗戦後二、三年の混乱期、二十六年頃までの新人輩出期、三十年までの分野画定期の三つの時期に大別して、井上靖、松本清張、田宮虎彦、南條範夫、五味康祐、柳田知怒夫らを戦後の新人としてあげていたが、今ではこれらの作家のほとんどが押しもおされもしない中堅、あるいは大家におさまっていることを考え合わせると、十年の年輪をいや応なしに実感させられる。さらに第三の時期に関連して、時代小説の流れが画然と二つの潮流に分れたことを指摘していたが、消耗品としての文学と、正統派としての流れが、その後の十年間にどのような変貌を刻んだかも、考えてみる必要があるはいないか。

三十年代に入ると、消耗品をねらう商品文学の生産はさらにはげしくなる一面、状況のマス化に抵抗して、歴史文学や史伝ものなどに傾斜する作家もふえ、萱原宏一のいう「分野画定」は、明確な線を引くことになった。剣豪リバイバルを分岐点に、一つは貸本文化を象徴する作品群から忍法ブームまでを輩出し、他は史伝小説から維新もの、教養的作品などの創造をうながすが、その詳細についてはここではふれない。昭和三十年度版から四十年度版までの計十一冊の「代表作時代小説」は、十年間の歩みを集約的に語ってくれる。ただスペースの関係で短篇中心の編集となつたため、状況のダイナミックな推移が明確に伝えられないというらみがある。しかし短篇の技

術ほど、その作家の技倆を端的に現すものはないとも云えるわけで、私たちは、これらの限られた収録作からも、その年度ごとの傾向を嗅ぎわけることが可能だ。

ここ一、二年のあいだ、大衆文学の草創期的存在であつたいくつかの先輩をうしなつた。そのことは個人全集の刊行が目立つことと合わせて、時代の状況が一つの整備期に入つたことを物語る。昭和四十年代の時代小説がどのような展開をしめすか、予言することはむずかしいが、その萌芽はすでにここに収録した十九篇の作品のなかに秘んでいるにちがいない。十年まえの新人たちは現在の中堅なのだ。今日の新人は十年後の状況をその一作一作によつて新らしくつくりかえようとしているはずである。おそらく十年たつてもエンターテインメントとしての文学の需要はあとをたつことはあるまい。だがその一面で「大人の文学」がしきりに模索され、純文学と大衆文学のあいだにある垣根が、その部分からはずされてゆくことは想像される。

昭和四十年という年は、そういった感慨を改めて懐かせる年でもあるようだ。

収録された十九本の中・短篇は、昭和三十九年七月から四十年六月までの一年間に、『小説新潮』『オール読物』など九誌に発表された時代小説（開化ものを含む）のなかから択ばれた。鎌倉期から明治にいたる多様な時代相を写した諸作が、そのまま現在の大衆時代小説の現状を物語ることになるのかもしれない。

新顔は野村尚吾、永井路子、八切止夫、武田八洲満の四氏。神坂次郎、滝口康彦などをふくめて、いつになく新人が多いのも今年度の特徴の一つだ。野村尚吾は純文学の世界ではすでに顔なじみの作家だが、何度か直木賞候補にもえらばれ、「戦雲の座」「天田五郎の生涯」などの書下し

長篇にも、年季のつんだ重厚な味をしめす。「散所の梅」は第十一回「小説新潮賞」の受賞第一作として発表された中篇。くぐつまわしを一個の芸術にまでたかめようと努めながら、妻子に裏切られ、足利幕府の芸術政策の犠牲となり、目的をはたさず死んでしまう主人公の姿には作者の悲願がこもっているようだ。手がたく書きこんだ文章も人がらをそのまま伝える思いで好感が持てた。永井路子は「青苔記」で第四十五回直木賞候補になったことのある新人。鎌倉三代の興亡をオムニバス形式でえがいた長篇「炎環」で五十二回直木賞を、安西篤子とともに受けた。「打とうよ鼓」はその受賞第一作である。彼女にはこの時期、平維仲兄弟と兼家との関係を主題にした「瓢風(つむじかぜ)」や、やぶにらみの平忠盛の術策にみちた生涯を軽妙にたどった「すがめ殿」などの作品があつた。八切止夫「寸法武者」は小説現代新人賞の受賞作。鳥居強右衛門異聞で、上から下までともかくもカッコウだけとれた武者を寸法武者というそうだが、現代の世相に照らして読んでも興味がある。彼には他に「乱妨武者」一篇があつた。武田八洲満は第二十二回オール新人賞を受けたことのある新鷹会の新進。聞書形式を生かして一故老の年輪を世態の推移とともに語る。やや冗漫な部分が気になるが、視点を低くかまえた創作態度は、悪くない。神坂次郎も同じく新鷹会のメンバーのひとり。「代表作時代小説」にはすでに数回登場している。「虱の唄」は『小説倶楽部』が連載した「赤穂義士外伝」シリーズの一篇で、帰化人の裔武林唯七の青春をえがく。この種のものは書きふるされているだけに新味を盛ることがむずかしいにちがいない。滝口康彦もオール新人賞の出身。話題を呼んだ「切腹」の原作者としても知られる。「拝領妻始末」は佐賀市で発行されている同人誌『城』の第二十八号に掲載された作品。封建武士の苦衷を

えがいてみごとなまともりを見せてくれる。身錢を切つたこの種の労作に私たちは注目する必要があろう。

中堅では司馬遼太郎、池波正太郎、伊藤桂一らの仕事が目をひく。伊藤桂一「簪」は疎外された男女の人間的な目ざめを、無駄のない文章でえがき、江戸市井ものに新しい味をそえる。彼の書く短篇がどことなく山本周五郎の作品にたどよう抒情を感じさせるのは、詩人の質の問題だろうか。「螢籠」「牡丹の絵」「鷺」などもそれぞれにすてがたい味があつた。池波正太郎も短篇の数は七本、熱のこもつた仕事をした一人であろう。「開化散髪どころ」は「人斬り半次郎」余聞といつた作品で、半次郎を殺そうとして失敗した刺客のひとり小野助三郎が明治改元後、神田今川橋に散髪処を開く。その助三郎と半次郎こと桐野利秋の再会が、人間の運命と歴史を暗示して感銘深い。「つるつる」「やぶれ弥五兵衛」「へそ五郎騒動」など印象にのこつた作品も少くない。司馬遼太郎は、おそらく今期いちばん精力的な活躍を見せた作家ではないだろうか。七本の短篇のほかに新聞、週刊誌の連載が数本、しかもいづれも凡打ではない。「倉敷の若旦那」は天誅組志士を敬慕し、その夢の実現を策して長州へ走つた倉敷の大町人中島屋の養子敬之助がにえきらない長州藩の態度に居たたまれず、倉敷代官所襲撃に立ち上る。根つからの若旦那氣質を捨てきれないこの若者の行動は、しかし維新後もむくわれることなく歴史の塵に埋もれようとしている。作者の人間観は、時代を語つて、それが文明批判にまでつき抜けているところに独得な味がある。この味はあくまでも現代人の感覚だ。

杉本苑子「尼と人魚」は戯作者山東京伝の遺族の心理的カットウをまとめた短篇。彼女には他

に首斬り浅右衛門を主人公にした「三ッぼくろの男」があつた。この作者にはまだまだよくばつた注文をつけても良いように思う。平岩弓枝「ちつちやなかみさん」も小品ながら後味の良い佳作。他に「邪魔つけ」という中篇が一篇あつた。女流作家による時代小説は、これまでなかなか育たなかつたが、今後平岩、杉本、永井、安西などの諸氏がどのような展開をみせてくれるかのしみである。

新田次郎「冬田の鶴」は農家の娘にたいする將軍のほのかな愛情と側近の術策を、単彩でえがいた小品。南條範夫「発端」は頼山陽の少年時代の天才ぶりを語つた作品で、長篇のプロログかもしれない。この作者も比較的短篇の数が多く「上忍秘譚」や「ハナノキ秘史」など記憶にのこる作品も少くなかつた。五味康祐「婆じやとて」は、二十枚ほどの掌篇ながら、よくまとまつた佳作。五味康祐の力量はむしろ二、三十枚の小品に凝縮されているように思うことが多いが、どうだろうか。

村上元三「ポーハタン号の密航者」は安政七年、遣米使節一行がオワフ島へ寄航したおりの挿話をえがいた短篇。時代小説は素材の上でまだまだ国の内外に眼をくぼる必要がある。「ポーハタン号の密航者」はその可能性に窓を拓く佳作であらう。山岡莊八「月の輪鼻毛」は日野俊基の遊説にからむ月の輪姫の物語。正成の深謀遠慮を証明する挿話でもあるが、「新太平記」余話ともいえよう。山本周五郎は寡作で知られる作家だ。長篇連載のほかはこの「ひとごろし」一本しか発表していない。臆病者でとおつている軽輩の武士が上意討ちを買つて出、剣術と半槍の名人を追跡する。まともによつたものでは勝ち目はないと踏んだ主人公は、臆病者らしくカメラ手戦

術を採用するのだが、全体にズリッとした小味のきいた短篇である。海音寺潮五郎「岐阜城のお茶々様」は、『文芸朝日』の読切連載「ただいま十六歳」の一篇。長篇のほかに「お家騒動・列伝」があるが、枚数の都合もあつてこれをとつた。なお編集委員のひとり武蔵野次郎「いぬ侍」は、彼がここ一二年うちこんでいる黒田騒動ものの一つ。作者は栗山大膳の血をひくひとりであると聞いた。

新人にはオール新人賞の中川静子「幽囚転転」、直木賞候補の宮地佐一郎「闘鶏絵図」など手堅い作品もあつた。柴田錬三郎など長篇に主力が注がれたため収録できなかった作家もある。また子母澤寛「玉瘤」は編集委員の全員が一致して推薦した佳作だったが、作者の都合もあつてはずされた。彰義隊生き残りの敗残の姿をえがいたこの中篇は、作者が創り出した独得な形式とあいまつて、詩情をたたえた鎮魂歌にまつまつていた。スペースの都合で見送られたが、山田風太郎「忍法破倭兵状」は、朝鮮の役の虜囚をえがいた異色の中篇であつたことを附記しておく。

目次

開化散髪どころ
 簪
 岐阜城のお茶々様
 虱の唄
 婆じゃとて
 倉敷の若旦那
 尼と人魚
 拝領妻始末
 石屋甚吉覚書
 打とうよ鼓

池波正太郎
 伊藤桂一
 海音寺潮五郎
 神坂次郎
 五味康祐
 司馬遼太郎
 杉本苑子
 滝口康彦
 武田八洲満
 永井路子

三
 三
 三
 三
 九
 二九
 二三
 二五
 二七
 二九

発 冬 散 ち い ポー 寸 月 「
 田 所 っ ぬー ハ の の
 の の な な タ タ 輪 鼻
 鶴 梅 さん 密 航 者 毛
 端 侍 者 者 し

南條 範夫	新田 次郎	野村 尚吾	平岩 弓枝	武蔵野次郎	村上 元三	八切 止夫	山岡 莊八	山本周五郎	まえがき	あとがき
三三	三五	三六	三〇一	三七	三九	四七	三八	三九	尾崎 秀樹	村上 元三

開^{かい}化^か散^{さん}髪^{ぱう}
どころ

池
波
正
太
郎

作者のことは

池波正太郎

この小説には、父方母方の祖父母や親類たちが諸方に顔を出していますし、私も、それらの人々から得た〔江戸人〕の印象、記憶を何とか再現しようとして、その〔気分〕をつくり出すことに苦勞をしました。

いわゆる何代もつづいて江戸、または東京に住みついて来たものには、俗にいう〔五月の鯉の吹流し〕とか〔宵越しの銭は……〕とかいう言葉では、とても言いつくせぬ氣質があるようです。

この短篇に、それが出ているかどうか……。

尚、この小説の最後に出てくる〔鈴〕という女は、私の母であります。

著者略歴

大正十二年一月二十五日 東京都生

東京都品川区荏原二ノ二三四

日本文芸家協会々員

著書（小説）恩田木工、眼、信濃大名記、竜

尾の剣、応仁の乱、錯乱（三十五年以上

半期直木賞受賞）、夜の戦士

（上演戯曲）檻の中、渡辺華山名寄、岩、

黒雲峠、賊将その他